敗れて見えるもの

岸川瑞恵

目に留まった新聞記事があると、小さく切り抜き、ファイルしている。時々暇つぶしに開いてみるが、二〇一八年の新聞の中に「敗れて見えるものがある」と大きく見出しがある記事が目に留まった。初めの数行だけを、かいつまんで読んでみた。

東大野球部は創部から百周年の間に東京六大学リーグで一度も優勝することがなかったという。東大……いわゆる東京大学は誰もが知っている最難関の学校である。「常敗が運命づけられているかのような歴史」と記事にはあるが、負けても仕方がないと許されるものがあるのかもしれない。

息子が小学一年生の秋、私は「Kヤングラガーズ」という少年ラグビーチームに息子の入部申し込みをした。体が華奢で子供会の野球チームに誘われても逃げ帰ってくるような、運動がからきし駄目な子である。逞しい子に育ってほしいとの私の勝手な願いだけで、本人の気持ちを確かめることのない入部申し込みだった。

初日の練習は一月半ばの日曜日。福岡歯科大グラウンドに九時集合。

この日は大変寒く、雪が舞っていた。テスト期間の子供たちにはユニフォームがない。裸にいきなり学校の体操服と体操パンツ（短パン）を身に付けただけで、冷たい風が吹きつけるグラウンドに並ばされた。

息子はこんな薄着で雪の中に立つという経験が一度もない。厳寒の中、シャツ一枚で外へ放り出すなど、親としてこの現実を目の当たりにすることには辛いものがあった。息子も不安がいっぱいで、心身ともに縮こまっていたことだろう。頻りに足ふみをして寒さを紛らわせ

ていた。

その年の入部希望者は、幼稚園年長さんから小学一年生まで二十人ほどいただろうか。

全員、コーチの合図でグラウンドを走り始めた。子供たちの泣き声が校舎にぶつかり、広いグラウンドに跳ね返って聞こえてくる。この泣き声を「おたけび」と年配のコーチは言って、毎年恒例のことだと笑った。泣く子供ほど将来強くなるのだそうだ。自我が強く根性があるのだという。息子はどうだろうと様子を見れば、泣きもせず頑張りもせず、最後尾をとろとろと走っていた。

我が家はゆっくりしていた日曜日の朝が、九時から十二時までの練習で慌ただしくなった。息子は辞めたいとも頑張るとも言わず、親が引っ張っていくから、仕方なく付いていくという感じに見える。次第に脱落者が出てきて、春が近づいた正式入部の頃は、半分ほどに減っていた。

四月初め入部が認められ、初めてラガーシャツに袖を通した。赤い地色に黒い横縞が二本入っている。左胸のKヤングラガーズの黄色いワッペンが、一際明るく目についた。白い短パンと膝から足首までの特殊なハイソックス、そしてスパイクシューズ。みんな可愛いラガーマンになっている。翌週からは各学年に分かれて練習が始まった。

息子は相変わらずマイペースだった。タックルはするのもされるのも怖い様子で、弱腰である。スクラムを組めば体が小さく力がないので、押すどころかいつの間にか味方からはじき出される始末。彼には強くなりたいという欲が感じられなかった。

三年生になる頃からコーチが発する檄が「岸川に負けるな！」になった。仲間のお母さんたちが「あんな言い方、失礼よね。岸川君がかわいそうよ」と、多分私に代わって憤ってくれていたのだろう。我が子が言われたのなら許さない、とばかりの憤慨だったが、私の考えは少し違った。確かにあのような言い方は子供のプライドを傷つける。しかし、スポーツは勝利を競う世界である。強い選手を育てるのがコーチの役目。多感な年齢の子供に対する言葉には気を付けてほしいと思わないでもないが、言われて悔しいなら言われないように頑張ればよい、と私はそう考えるのだ。

四年生になった時、コーチが変わった。夏の合宿も期間が一週間ほどに延びて、その年は大分県の鯛生金山での合宿だった。

山道を駆け上がる鍛錬があったそうだ。駆け上がり、そして駆け下り、また駆け上がる。何度も繰り返すうち、

みんな息が荒くなりふらふらになった。コーチが「走れ！」と檄を飛ばすが、子供たちは暑さと疲れで体力が限界に近づいていたのだろう。もう無理かと誰もが感じた時、遙か下の方から「ウォー」と声がして息子が坂道を猛スピードで駆け上がってきたという。ごぼう抜きで先頭に立った時、ふらふらしていた子供たちが、息子を追いかけるように全速力で駆け出したそうだ。「弱虫な岸川に負けるな」の精神だったのかもしれない。「岸川が皆を引っ張ってくれたお陰で、有意義な合宿になった」と、息子は初めてコーチから褒められた。

合宿が終わり、貸し切りバスから降りてきた彼の胸には、ラグビーボールのような楕円形のスイカが大事に抱えられていた。今回の合宿の一番の功労者とのことで、ご褒美がこのスイカだったのである。

五年生になった時、息子は虫垂炎になり、退院後もしばらくドクターストップがかかって練習を休んだ。コーチや仲間のみんなが「待っているよ」と声をかけてくれたが、息子は再びユニフォームを着ることを拒んだ。辞めるなら今しかないと彼なりに考えたのだろう。

意思が固いことを知った学年ヘッドコーチが、記念にKヤングラガーズのユニフォームを着た、特注の博多人形をくださった。中学三年で、このチームの卒業を迎える子供たちには、修了証書と共におそらくこの人形が贈られるのだろう。息子は特別早くいただいたことになる。ラグビーボールを持った人形は左胸にKヤングラガーズの黄色いワッペンと、背中には息子の背番号の「8」が入っていた。

コーチの「岸川に負けるな」の嫌味な檄に腹も立てず刺激も受けず、淡々とマイペースで過ごした彼だったが、毎週日曜日の朝の三時間は、運動が苦手な息子にはつらい時間だったことだろう。辞めた直後、かける言葉を探したが、すぐには見つからなかった。後日、人形が立っている台座の後ろに、私は油性ペンで「四年間、よく頑張りました」と書いておいた。